

第31期目録委員会記録 No.13

第13回委員会

日時：2008年10月25日（土）14時10分～17時10分

場所：日本図書館協会5階会議室

出席：中井委員長，稲浜，木下，古川，横山，渡邊

<事務局> 磯部

[配付資料]

1. 2008年10月25日目録委員会予定議事（3ページ-A4，中井委員長）
2. 特集：これからの図書館目録に向けて（「現代の図書館」第46巻第3号，事務局）
3. A Review of the Feasibility of an International Standard Authority Data Number (ISADN)
（IFLA FRANARワーキンググループのウェブサイトより，15ページ-A4，事務局）
4. Names of Persons, 1996 [抜粋：日本人の名前]（IFLA目録分科会のウェブサイトより，
2ページ-A3，事務局）
5. 日本のAnonymous Classics（2000年1-3月の委員会記録からの抜粋，1ページ-A4，古川委員・事務局）
6. “Uniform Titles From AACR to RDA” by Jean Weihs and Lynne C. Howarth（*Cataloging & Classification Quarterly*, v.46, no.4, p. 362-384，12ページ-A4，事務局）
7. AACRからRDAにいたる統一タイトル（5ページ-A4，渡邊委員）
8. 統一タイトル論への序章 [抜粋]、統一タイトルおよび本タイトルに関する再考察 [抜粋]（「資料組織化研究」50，51より，計10ページ-A4，古川委員）
9. FRBRのその後：FRBR目録規則？FRBR OPAC？（谷口祥一氏のウェブサイトより，21ページ-A4，事務局）
10. 日本目録規則1987年版改訂3版についての疑問点（2ページ-A4，松井純子氏・事務局）
11. VIAF (Virtual International Authority File) Criteria for Membership and Priorities for Languages/Scripts（4ページ-A4，中井委員長）
12. 第31期目録委員会記録 No.12（案）（2ページ-A4，事務局）

[報告事項]

前回の議事録案（資料12）および前々回の議事録案が承認された。

目録関係の情報（資料2、特集：目録の現状と未来（「情報の科学と技術」第58巻9号））については各自、目を通しておくこと。

全国図書館大会の第14分科会は、45名の出席者があり、盛況だった。

11月28日に国立国会図書館が開催する「平成20年度書誌調整連絡会議」で、中井委員長が目録委員会の報告を行う。また、コメンテータとして渡邊委員が出席する。

国立国会図書館は、2009年2月に「目録の現在とこれから」をテーマとした公開講演会を

開催する予定である。講演者は慶應義塾大学の上田修一先生、渡邊委員と国会図書館から中井委員長。

VIAFについて、国立国会図書館と国立情報学研究所に参加要請があった(資料11)。MARC XMLへの変換可能性が課題であるが、前向きに検討を行っている。

公共図書館関係者が目録委員会委員となるよう、引き続き委員候補者を探している。

[検討事項]

1. RDA草案について

草案の公開が遅延しているため(10月13日 11月3日の週)、次回に検討を行う。

資料2のうち、鈴木啓子氏の論稿(世界に向けての新しい目録規則：RDA策定の動向)は、予備知識を持って読むとさらに興味深い。米国の現場からの意見として参考になる。

2. IFLA関係の検討事項について

国際目録原則覚書について

IME ICC出席者に対して最終投票の予告があった。目録委員会では渡邊委員と横山委員が投票するが、委員会としても引き続き動向を注視していく。

国際標準典拠番号(ISADN)について

資料3について横山委員から説明があり、引き続き動向を注視していくこととした。

関連して次のような指摘があった。

- ・資料3で言及されているISNI(International Standard Name Identifier)の”Name”は意味をとって「創作者」と訳している文献があるとのことだが、Dublin Coreの”Creator”こそ「創作者」と訳すべきである。

ISBD Preliminary Consolidated Editionの例示集に収録予定の日本語の例示について

ISBD Review Groupからの確認依頼については、稲濱委員が回答済である。本文に掲載済の例示で発見された日本語の誤りについては、中井委員長が集約の上で回答する予定。

Names of personsの改訂について

資料4について稲濱委員から説明があり、今後の対応方針等を検討した。主な指摘・意見は次のとおり。

- ・構成要素として言語コード、国名コードを加えるべきという意見が出ているようだ。
- ・”Japanese”のうち、Preliminary notesは修正が必要ではないか。1885年以前の日本人で姓を有する者はほとんど存在しなかったかのような記述になっているが、著者となるような人物は姓を有しているのが普通で、姓名形でないのは僧侶等のみである。
- ・Name Elementsの例示で女性は名の末尾が「子」とあるが、最近はそうでないことが多いし、俳人等は男性でも「子」を使っている。
- ・末尾が「男」「彦」なら男性の可能性が高い、と同程度に捉えれば良い。日本語を知らない海外の目録担当者にとっては、今でも有意な情報である。
- ・例示は差し替えたほうが良いかもしれない。

なお、本件に関するIFLA目録分科会との対応窓口は、稲濱委員が務めることになった。

Anonymous classicsの改訂について

IFLA目録分科会常任委員会の担当者から、日本の窓口を知りたい旨の要請があった。これまでの経緯を調べたところ、資料5のとおり、2000年2月から3月にかけて目録委員会から回答済であるにもかかわらず、その後先方から連絡がなかったようである。

本件は、当面、中井委員長が窓口となり、当時の経緯を伝えるとともに必要な作業等を知らせてもらうことになった。

3. 統一タイトルについて

資料6、7について渡邊委員から、資料8について古川委員から説明があった。主な指摘・意見は次のとおり。

- ・ RDAを理解するためにも、統一タイトルを知る必要がある。
- ・ 基本記入方式でない日本では、著者-タイトル形の統一タイトルは馴染みにくい。JAPAN/MARCでは著者-タイトル形を扱うようになっていない。
- ・ そもそも、JAPAN/MARCには統一タイトルを収めるフィールドがない。統一タイトル件名はあるが、普通件名と同一のフィールドに収められてしまっている。
- ・ Super workやBibliographic familyについても統一タイトルとしての扱いが有用である。
- ・ 同一著作の書誌レコード間の関連の表現方法は、典拠ファイルで管理、各書誌レコードのリンク、原書名注記の3通りある。
- ・ 日本では、翻訳文化の伝統もあり、原書名との関連は今でも重要である。
- ・ 原書名注記のタイトルは翻訳の底本であり、重訳の場合は原本に辿り着けない。
- ・ 著者標目と違い、統一タイトルは原語形での記録を受容するようになっていない。
- ・ 何をもって統一タイトルとするか、MARCの構造にも影響する。
- ・ 国際目録原則覚書のような原則レベルと個々の目録規則とでは扱いも異なる。原則レベルでは規定できても、目録規則は現場を無視して規定を定めるわけにいかない。
- ・ 構成単位の統一タイトルはどう扱うか等、粒度の問題もある。

4. FRBR化目録について

海外の幾つかの例について、古川委員から次のとおり紹介があった。

- ・ OCLCのFictionFinderの例から引き出せるFRBR化目録の特徴は、集中性、階層性、分析性である。
 - ・ The Perseus Digital Libraryはギリシャ・ラテン古典を対象とした電子図書館だが、このような著作が限られ、表現・体現形が多い分野こそFRBR化が効果的である。
- また、海外の事例や資料9を基に、次のような指摘・意見が出された。
- ・ MARC21は7xxがあるのでFRBR化が可能だが、日本の現状では難しいのではないか。
 - ・ Aggregates、Super work、Bibliographic familyの扱いが問題である。
 - ・ 個々の短歌・俳句、雑誌の編集後記の扱い等、著作の粒度の問題もある。
 - ・ 日本の研究例は、欧米と有効性の度合いが違うようだが、理由が気になる。

5. 日本目録規則1987年版改訂3版における表現の不統一について

資料10で指摘された諸事項について、次のような意見があった。

・統一は必要だが、条文の理解に支障が出るほどのものではない。
検討の結果、次の刷(3刷)で直すこととし、現時点では正誤表は出さないこととした。
なお、松井氏にはその旨を直接回答する(委員会終了後確認)。

次回の委員会の予定は次のとおり。

11月22日(土)

12月13日(土)

以上